

# 秋の気配

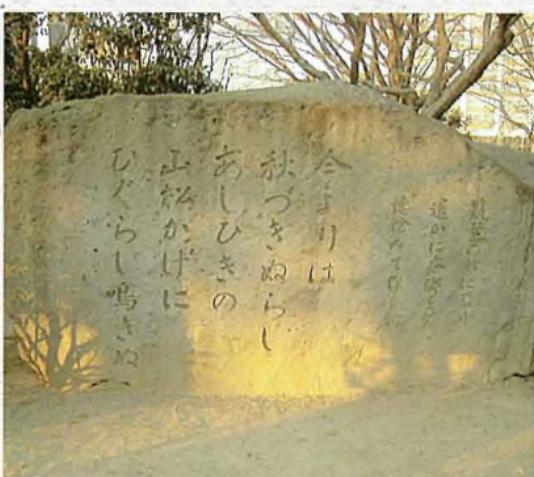
今よりは 秋づきぬらし  
あしひきの 山松蔭に ひぐらし鳴  
(卷十五一三六五五)

万葉集の卷十五には、天平八(七三  
六)年の六月に日本から遠く離れた新  
羅の国に派遣された人々——いわゆる遣  
新羅使の歌が収載されています。その  
数は一四五首にのぼり、出発の時の別  
れを哀しむ歌から、旅の途中での様々  
な思いを詠んだものまで、その内容は  
多岐にわたっています。

その中で、この歌は遣新羅使が瀬戸  
内海を抜け、九州の筑紫の館に到着し、  
遠く故郷を思つて詠んだ四首の最後の  
歌です。なんとももの悲しく山の松蔭  
で鳴くひぐらしの声を耳にして、これ  
からはますます秋らしくなつていくの  
だろうというのです。この歌のすぐ後

に、七夕(天の川)の歌があることか  
ら、この歌も、その頃——つまり旧暦の  
七月になる頃(現在の八月上旬から中  
旬頃)に詠まれたのでしよう。暦の上  
ではもう秋であることは認識していた  
が、ひぐらしの声で、実感としても秋  
の訪れが身にしみるというのです。  
遣新羅使の出発の折りの歌に「わが  
故に思ひな瘦せそ秋風の吹かむその月  
逢はむものゆゑ」(卷十五一三五八六)

筑紫の館とは、当時の大宰府のいわ  
ば迎賓館として博多湾のすぐそばに作  
られた施設で、海路で訪れた役人や、  
外国の使節の宿泊所としても利用され  
たようです。現在の福岡市中央区の福  
岡城趾にあり、かつての西鉄ライオン  
ズや、新しくはダイエー・ホークス(現  
ソフトバンク)の本拠地として使用さ  
れた平和台球場のほぼ真下及びその周  
辺から遺跡が見つかっています。その  
遺跡のすぐそばの、福岡城のお濠端に  
この歌の歌碑がたつています。



福岡城趾に建つ筑紫の館の歌碑(揮毫 倉野憲司)